九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

乳幼児を持つ母親の育児不安についての研究 : ライフコースと自我同一性地位との関連から

宮本, 純子
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/15729

出版情報：九州大学心理学研究. 9, pp.215-221, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2008, Vol.9, 215-221

乳幼児を持つ母親の育児不安についての研究
―ライフコースと自我同一性地位との関連から―

宮本　純子　九州大学大学院人間環境学府

A study on child-care-anxiety of mothers who have small children
―The relation between child-care-anxiety and the viewpoint of life course and identity status―

Junko Miyamoto (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

This study examined the relation between child-care-anxiety and the viewpoint of life course and identity status. Eight hundred eighty-five mothers who have small children participated in a questionnaire survey. We classified life course into 3groups ; Group Ⅰ is mothers who keep working still now. Group Ⅱ is mothers who stopped working but back to work. Group Ⅲ is mothers who don't want to work, and stay at home to keep house hold. We grasp identity status for 3groups. We examined the relation between child-care-anxiety and the viewpoint of identity status and life course. It was found that child-care-anxiety associated with identity status and with life course. Group Ⅱ showed a significantly higher score than Group Ⅲ. Diffusion showed a significantly higher score for all identity status except moratorium. Attainment did not show a significantly lower score than foreclosure. It was showed that child-care-anxiety was weaker by integration of identity, but attainment was not the significantly lowest score for all identity status and had another factors of child-care-anxiety.

Keywords: child-care-anxiety, life course, identity status

Ⅰ　問題と目的

近年，痛ましい虐待事件が頻繁に発生し，育児に当たって悩んだり，不安を抱いたりする母親が増加している。川井尚ら（1993）による育児不安に関する基礎的研究では，３歳未満の乳幼児を持つ母親766名を対象にしたところ，61%が「育児ノイローゼに共感できる」と述べ，また「叱りすぎるなど，子どものことを虐待しているのではないかと思う」者が23%もいた。20%の者が「母親として不適格であると感じる」と答え，26%の者が「何となく育児に自信がもてないように思う」ことを肯定している。32%が「ひどく疲れやすい」と言い，31%の者が「とても心配性で，あれこれ気にやむことが多い」とも答えている。このように育児に不安や疲労や葛藤を感じている母親は予想以上に多く，育児不安や幼児虐待は，特殊な母親だけが体験するものではなくなってきている。岡本（1997）は，一般的な普通の母親も「子育てはつらい」「我が子をかわいく思えない」などの気持ちを持つと述べている。

「育児不安」という用語が使われるようになったのは，学術的には1976年の高橋・中の論文においてであり，その後，1980年代に普及し始めた（岩田，2000）。

牧野（1982）は，「育児行為の中で一時的あるいは瞬間的に生ずる育児の疑問や心配ではなく，持続し，蓄積された不安の状態を問題とし，この現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」を育児不安と定義した。そして，乳幼児をもつ母親を対象に，育児不安と社会的な人間関係や夫婦関係の関連を分析し，育児不安の程度は母親の社会的関係の広さや夫との関係に規定されていることを見いだした（牧野，1982, 1985, 1987）。

岡本（1996）は，子育て期の女性の自我同一性の統合のありかたを調査し，子どもを持つ全ての女性が母親であることを受容し，母親である自分を自己の生き方の中に統合しているわけではないことを示唆した。

幼児期からの重要な他者への数々の同一化の主体的選択と統合の結果として獲得される個としての自我同一性と母親役割の反映として獲得される母親としての自我同一性を自己の中でどのように両立，調和させ，統合させていくかは，現代女性にとっては必ずしも容易なプロセスではないと述べている。

また，かつて，母親である自分を自己の生き方の中心にすえ子育てを生きがいとし，疑うべくもなく親から受け継いだ伝統的な生き方をしていればよかった時代に対し，今日においては，女性の高学歴化，生き方の多様性が求められるようになり，従来の価値観とは違った生き方が問い直されるようになった。岡本（1997）は，現代の育児期の女性の問題として，母親としての役割だけでは自我同一性を支えきれなくなっているという点も挙げている。母親としての自我同一性と個としての自我同一

性を統合できずにいるのならば，この葛藤は現代の育児不安と関係しているのではないだろうか。

名越ら（1997）の母親のライフコースと育児不安の程度との関連の調査では，結婚・出産前に専業主婦を希望していた母親群が，他のライフコースを希望していた母親群と比較して育児不安の程度が有意に高いことを明らかにした。また，母親のライフコース希望は，結婚・出産前と現在では大きな変化が見られ，就業希望へと変化している母親が大多数であった。現代の母親の育児不安は育児そのものへの不安とともに，自分自身の生きがいがないことや，社会に出て自分の能力が発揮できないという状況への不安も大きな要因ではないかと推察している。

母親の役割だけでは自我同一性を支えきれなくなった母親がどのようなライフコースを歩み，どのように自我同一性を統合していくのであろうか。ライフコース毎に育児期の女性の自我同一性の状態を知ることは，ライフコースと自我同一性の関連を知る手だてとなるとともに現代の育児期の女性の自我同一性の状態を知る手だてになると思われる。普通の母親が育児不安を抱くようになった今日，育児期の女性の自我同一性を把握することは，育児不安を抱く母親を知る一助になるものと思われる。

そこで本研究の目的は，以下の二つとする。

(1) 自我同一性の状態を自我同一性地位で捉え，ライフコース別に育児期の女性の自我同一性地位の分布を検討する。

(2) ライフコース別に我同一性地位と育児不安との関連を検討する。

II　方　法

1．調査対象者

A市の乳幼児をもつ母親981名（公民館の育児サロンに参加している母親455名，保育園に子どもを通わせている母親526名）を対象とした。分析対象は無回答の項目があるものや回答内容に不備のあったものなどを除いた885名分のデータ（公民館の育児サロンに参加している母親403名，保育園に子どもを通わせている母親482名）であった。平均年齢は 33.29歳（SD 5.53）であった。

2．調査手続き

2003年11月中旬～12月中旬に公民館で，2005年8月中旬～10月初旬に保育園で質問紙調査を行った。公民館では，筆者が直接出向き質問紙の主旨を説明した後その場で記入回収した。保育園は，先生に配布していただき2週間後に回収した。なお，回収率は75％であった。

3．調査内容

以下の構成からなる質問紙調査を実施した。

(1) 育児不安尺度：牧野（1982）の作成した育児不安尺度14項目から先行研究（江上，2005）にて有効性が高いと認められた10項目を使用した。牧野によれば，育児不安とは子どもや子育てに対する一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく，蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態と定義されている。評定は，「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くない」の4段階で回答を求め，それぞれ順に4点，3点，2点，1点とした。

(2) ライフコースを問う項目：フェイスシートで3つに分類したライフコースの中から○をつけてもらった。ライフコースはⅠ就業継続型（結婚・出産後も仕事をやめずに継続している），Ⅱ再就職型（結婚，あるいは出産で仕事をやめ，育児がひと段落してから再就職することを考えている。あるいはすでに再就職している），Ⅲ専業主婦型（結婚，あるいは出産で仕事をやめて，専業主婦になり，今後もずっと専業主婦の予定）の3群である。

(3) 自我同一性地位判別尺度：加藤（1983）の作成した尺度で，Marciaの同一性地位概念を踏まえて「現在の自己投入」の水準，「過去の危機」の水準」「将来の自己投入の希求」の水準の3つの変数の値から，6つの同一性地位に分類するものである。全12項目で回答は「全くそのとおりだ」「かなりそうだ」「どちらかといえばそうだ」「どちらかといえばそうではない」「そうではない」「全くそうではない」の6段階評定で，それぞれ順に6点，5点，4点，3点，2点，1点とした。

4．分析方法

(1) ライフコース別自我同一性地位の分布：加藤（1983）の指摘した分類基準に従って，乳幼児をもつ母親の自我同一性地位をライフコース別に分類し，χ 2乗検定を行なう。

(2) ライフコース別自我同一性地位と育児不安との関連：ライフコース（3水準）と自我同一性地位（6水準）を独立変数，育児不安合計得点を従属変数とする2要因の分散分析を実施。

III　結　果

1.ライフコース別自我同一性地位の分布

結果は，Table 1のとおりである。調査対象の内訳は，就業継続型，再就職型，専業主婦型の順に述べると，A：同一性達成地位（attainment）10人，19人，8人，B：同一性達成－権威受容中間地位（A-F 中間地位）23人，16人，8人，C：権威受容地位（foreclosure）7人，7人，

8人，D：積極的モラトリアム地位（moratorium）11人，10人，20人，E：同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位（D-M 中間地位）160人，183人，230人，F；同一性拡散地位（diffusion）42人，52人，71人であった。

検定の結果，自我同一性の分布に有意差があった（$\chi^2=23.26$ df=10 $p<.01$）。残差分析では，同一性達成群において，再就職型が多く（$p<.05$），専業主婦型が少なかった（$p<.05$）。同一性達成－権威受容中間地位群では，就業継続型が多く（$p<.01$），専業主婦型が少なかった（$p<.01$）。他の群はライフコースによる差異はみられなかった（Table 1，Fig.1）。

2．ライフコース別自我同一性地位と育児不安との関連

結果は，Table 2（および Fig.2）のとおりである。自我同一性地位とライフコースの主効果が有意であり（順に $F(2,867)=5.87$，$p<.01$，$F(5,867)=15.69$，$p<.001$）多重比較を Fig.3，Fig.4 に示す。自我同一性地位と育児不安の関連において多重比較の結果より，同一性拡散地位群は積極的モラトリアム地位群を除いたすべての群より育児不安が高かった。また同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群と積極的モラトリアム地位群は，権威受容地位群と同一性達成—権威受容中間地位群より有意に育児不安が高かった。一方，同一性達成－権威受容中間地位群と権威受容地位群が積極的モラトリアム地位群，同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群，同一性拡散地位群より育児不安が有意に低かったといえる。自我同一性が拡散傾向にある地位群ほど，育児不安が高いことが示唆された。しかし，その一方で，自我同一性達成地位群が同一性達成－権威受容中間地位群と権威受容地位群に比べて積極的モラトリアム地位群，同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群より育児不安が有意に低いという結果にはならなかった。

また，ライフコースの主効果がみられたことから，ライフコースは自我同一性地位に関係なく育児不安と関連することが示された。多重比較より，専業主婦型は再就職型よりも有意に育児不安が低いことが示された。

Ⅳ　考　察

1．ライフコース別自我同一性地位の分布

自我同一性地位の分布では，専業主婦型が就業継続型や再就職希望型に比べ，同一達成群や同一性達成－権威受容中間地位群の割合が有意に低いことが示された。

加藤（1983）は，同一性の状態を規定する心理社会的

Table 1
ライフコース別自我同一性地位の分布（ ）内は%を示す

自我同一性地位	自我同一性地位の定義	就業継続型（253人）	再就職型（287人）	専業主婦型（345人）	計 885人
A：同一性達成	過去に高い水準の危機を経験し，現在高い水準の自己投入	10(4.0)	19(6.6)*	8(2.3)*	37(4.2)
B：A-F 中間	同一性達成－権威受容中間地位	23(9.1)**	16(5.6)	8(2.3)**	47(5.3)
C：権威受容	過去に低い水準の危機しか経験せず，現在高い水準の自己投入	7(2.8)	7(2.4)	8(2.3)	22(2.5)
D：積極的モラトリアム	現在高い水準の自己投入をしていないが将来の自己投入を強く希求	11(4.3)	10(3.5)	20(5.8)	41(4.6)
E：D-M 中間	同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位	160(63.2)	183(63.8)	230(66.7)	573(64.7)
F：同一性拡散	現在低い自己投入しかしておらず，将来の自己投入の希求も弱い	42(16.6)	52(18.1)	71(20.6)	165(18.6)

※プラスの残差に網掛け　**$p<.01$　*$p<.05$　+$p<.10$

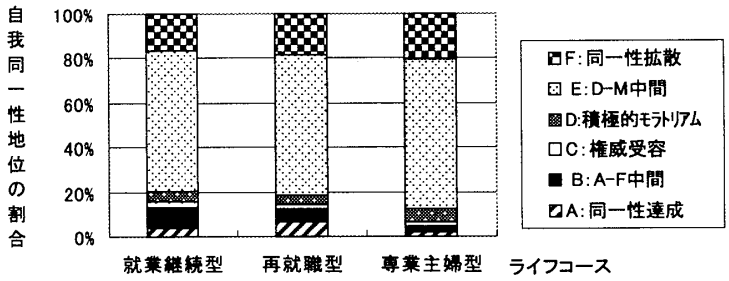

Fig.1　ライフコース別自我同一性地位の分布

Table 2
育児不安の得点の平均値と標準偏差

	A 同一性達成地位 (37人)	B A-F 中間地位 (47人)	C 権威受容地位 (22人)	D 積極的モラトリアム地位 (41人)	E D-M 中間地位 (573人)	F 同一性拡散地位 (165人)
育児不安合計						
Ⅰ 就業継続型 (253人)	25.10 (4.70)	24.30 (5.89)	22.43 (4.86)	25.36 (5.90)	24.96 (4.57)	28.07 (3.60)
Ⅱ 再就職型 (287人)	25.53 (4.77)	22.31 (4.30)	22.29 (3.40)	27.20 (5.22)	25.73 (4.46)	28.25 (4.46)
Ⅲ 専業主婦型 (345人)	21.00 (3.78)	20.88 (5.99)	18.75 (5.06)	27.50 (4.57)	24.36 (4.28)	26.00 (4.60)

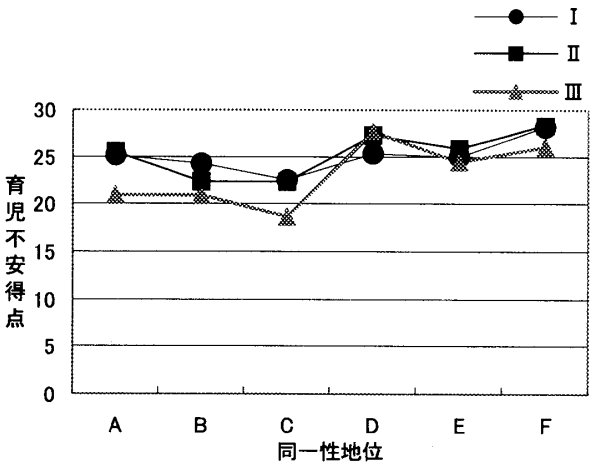

Fig.2　ライフコース別地位ごとの育児不安得点

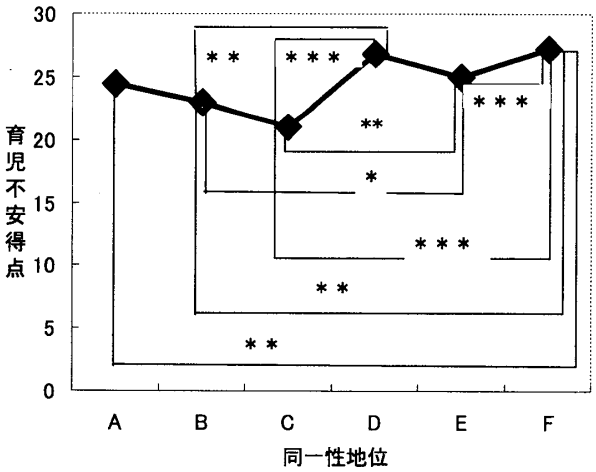

Fig.3　地位別育児不安得点
$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$　$^{***}p<.001$

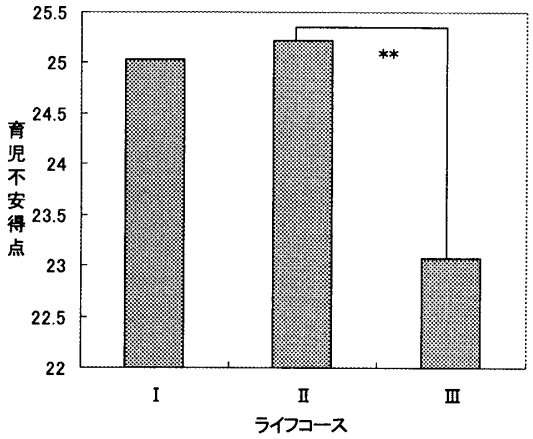

Fig.4　ライフコース別育児不安得点
$^{**}p<.01$

要因として「危機」と「自己投入」の2変数を「現在の自己投入の」水準，「過去の危機」の水準，「将来の自己投入の希求」の水準の3時点での有無との関係から各個人の同一性の状態を捉え，自我同一性地位を判別した。同一性達成群や同一性達成－権威受容中間地位群は，「現在の自己投入」が高く「過去の危機」を経験している群である。専業主婦において，就業継続型や再就職型に比べ，同一性達成群や同一性達成－権威受容中間地位群の割合が低いのはなぜだろうか。

経済企画庁国民生活局（1987）の調査では，女性が理想とするライフコースは，結婚ないし出産を機に離職し，子どもが一定の年齢になったら再就職するコースが一番多く，43.4%を占めた。しかし，再就職が難しいことを反映し，現実には31.3%と低くなる。離職せずに仕事を持ち続けるか，専業主婦となるかという選択肢を余儀な

くされ，理想のライフコースをとれないままに葛藤を内面に抱え込んでいる可能性がある。大日向（2002）は，子育て期に数年後の自分の姿に展望をもてないで不安を抱いている母親が多いことを述べている。母親にこのような葛藤が潜むならば，「現在の自己投入」が難しいものと予想される。また，名越ら（1997）の調査でも，結婚・出産前に専業主婦を希望していた母親群が，その後就業希望へと変化している母親が大多数であったと述べていることからも，専業主婦をしている母親群の中には現在のことに自己を投入できない割合が多いものと考えられ，自我同一性達成群が低くなったとも考えられよう。

一方，権威受容地位群，積極的モラトリアム地位群，同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群，同一性拡散地位群の割合は，ライフコースによって差異が出ないことが示された。4つの地位群では，どのライフコースでも似たような割合を示していることから，ライフコースに関係なく，別の要因が関係していることが考えられる。青年期までに達成されてきた発達課題や成人前期の発達課題である親密性などについて，検討する必要があるかと思われる。

2．ライフコース別自我同一性地位と育児不安との関連

ライフコースと自我同一性地位の要因は絡み合うことなく，各々別々に育児不安と関連していたことが示された。自我同一性地位の特質とライフコースの特徴を考えると，その組み合わせによっては，育児不安において有意な差が出るものと予想したが，二つの要因が絡み合って育児不安に影響を与えるということはなかった。積極的モラトリアム地位群は，将来の自己投入を求めて現在危機のさなかにいるというその特質と，現在の専業主婦型が抱えている将来への見通しを持てない不安とが絡み合って，育児不安が高くなるのではないかということが十分予想できたが，有意差は出なかった。やはり，お互いにそれほどには影響力を持たないのであろう。むしろ，それぞれの要因が独自に育児不安に影響を与えていることが示唆された。

(1) 自我同一性地位と育児不安

育児不安は自我同一性地位と関連があることが示された。多重比較より，同一性拡散地位群において有意に育児不安が高かった。同一性拡散地位群とは「現在低い自己投入しかしておらず，将来の自己投入の希求も弱い」群である。将来への望みもうすく，現在も漠然としたような過ごし方をしていることが予想され，不安も高いものと思われる。青年期の自我同一性の達成という課題がそのまま達成されずに育児期を迎えてしまったのか，あるいは，一度達成された同一性が，結婚し，新たな役割を統合している過程で拡散した状態になっているのか確定できないが，いずれにせよ，母親になった自分が何ものであり，現在何をなし，将来へどのようにつながっていくのか，展望を見いだすことができない群である。自我同一性達成の方向に少しでも進み，自分の自我同一性をしっかりと確立していくことが，育児不安解消にもつながっていくことと思われる。

また，権威受容地位群が積極的モラトリアム地位群，同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群，同一性拡散地位群に対して有意に育児不安が低かった。権威受容地位群とは「現在の自己投入が高いが，過去に低い水準の危機しか経験していない」群で，同一性達成地位群のように高い水準の危機を経験しているわけではない。しかし，育児不安が有意に低いのは，高い水準の危機を経験した同一性達成地位群ではなく，低い水準しか経験していない権威受容地位群であるのはなぜだろうか。原口ら（2005）は，今日の母親たちは，「自分で子育てをしたい」と同時に「自分の生き方を大切にしたい」という葛藤が生じる傾向が高く，その結果，現実自己と理想自己との間に生じたギャップが，育児を肯定的に捉えることを困難にさせ，育児不安などのネガティブな感情を喚起する要因となっていることを示唆している。同一性達成地位群では，同一性が達成したがゆえに求める理想自己が高いとするならば，現実自己とのギャップが大きく，育児不安が高くなる可能性が考えられる。「子育てをすること」と「自分の生き方を大切にする」ことの二つの理想の高さにどのように折り合いをつけるかということが，同一性達成地位群では重要になるのではないだろうか。

(2) ライフコースと育児不安

育児不安はライフコースと関連があることが示された。多重比較より，再就職型が専業主婦型より有意に育児不安が高かった。再就職型は，有職でありながらも，就業継続型に比べ，不本意な就職をしている場合も考えられ，将来に希望がもてない場合は，育児不安につながる可能性が示唆されている（宮本，2007）。

永久（1995）が，専業主婦が有職主婦より自分のあり方が将来展望に対する不安感情を持っていることを示し，将来自分のために何がしたいのかわからなくて焦っていることを示唆した。将来への希求が大きければ大きいほど専業主婦型の場合は，不安が強まる可能性が高く，再就職型や就業継続型よりも育児不安につながる可能性が考えられよう。

しかし，その一方で，就業継続型や再就職型は，家事や育児と仕事との間で葛藤が生じる可能性が高く，専業主婦型が家事や育児に自分を投入し，育児に専念できることで葛藤が少ないということも予想される。

本研究では，再就職型が専業主婦型より有意に育児不安が高かったことから，専業主婦が抱いてる将来展望に対する不安よりも，再就職型が家事や育児や仕事との間

の葛藤に揺れながら，将来に希望がもてない現実に直面し，不安を抱えている可能性が示唆された。経済企画庁国民生活局（1987）の調査では，女性が理想とするライフコースは，結婚ないし出産を機に離職し，子どもが一定の年齢になったら再就職するコースが一番多かったが，再就職型の現実は理想と違い，不安を抱えていることが示唆された。女性が理想とするライフコースとして希望の多い再就職型の理想と現実の違いについて詳細に検討することも今後重要かと思われる。

Ⅵ　まとめと今後の課題

自我同一性地位と育児不安は関連していたことから，育児不安を弱めるためには，自我同一性の確立が重要であることが示唆された。

自我同一性の確立には，達成動機と親和動機の影響が考えられることを，河村ら（2001）が明らかにした。青年の自我同一性の確立には，自己充実型の達成動機とポジティブな刺激の親和動機をもち，特定の人に偏った狭い範囲の交流のみではなく，さまざまな領域の活動に通じて多くの他者と関わることで，自他ともに尊重する相互的交流を体験することが，重要である。おそらく，これは育児期の女性にも通用することで，葛藤している自我同一性を統合するためには広い交流が必要なことと思われる。

しかし，服部ら（1991）が「密室の中の孤独な育児」が育児不安のもたらした要因であると考察し，地域の共同体が崩壊し，核家族化する中で，母親一人が育児を背負わなければならない現実を示唆した。現代の環境は，母親が孤立化し，自我同一性の統合が促進される傾向にはないものと思われる。積極的に広い交流が母親の自我同一性確立に必要であることを伝えるとともにそのような場を提供することが重要と思われる。

武田（1998）は乳幼児虐待の要因のひとつとして自己評価の低さをあげ，母親になったこと，育児中心の生活になったことによって，これまで自分自身が価値をおいていたものが失われていくという喪失感を指摘している。このことは，母親役割を担うことによって，個としての自我同一性が閉塞してしまったと岡本（2002）は述べている。多くの女性の場合は，20代後半から30代半ばまで出産・育児期にあたり，一つの自我同一性の葛藤の時期にあたると考えられ，結婚・出産までに形成してきた個としての自我同一性と新たな母親になることによって獲得されるべき母親としての自我同一性がしばしば葛藤を引き起こすことが指摘されている（岡本，1995）。本研究では，自我同一性拡散傾向の群がどのライフコースも多かった。個としての自我同一性と母親としての自我同一性が葛藤を引き起こし，そのまま閉塞してしまわないように，自分自身が価値をおいてきたものを積極的に大切にし，子育てをしていくことが自我同一性確立には必要なことではないだろうか。それが育児不安を弱めることにもつながることと思われる。

また，本研究では，権威受容地位群が育児不安が低く，同一性達成地位群が必ずしも権威受容地位群に比べ，育児不安が低いわけではないことが示され，「子育てをすること」と「自分の生き方を大切にする」ことの二つの折り合いをどのようにつけるかということが，同一性達成地位群では重要になることが示唆された。同一性達成地位群と権威受容地位群では，過去に経験した危機の水準が違うので，その経験した危機の水準の違いという視点に焦点をあてて，育児不安の程度を検討することも，今後必要かと思われる。

謝　辞

本論文作成にあたり，ご指導をいただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授の野島一彦先生に心より感謝申し上げます。また，お忙しい中貴重なご意見をいただきました同教授の松崎佳子先生にも深く感謝致します。

文　献

江上園子　(2005)．幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全　発達心理学研究，16(2)，122-134.

原口由紀子・松浦治代・矢倉紀子・佐々木くみ子・笠置綱清　(2005)．母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連　小児保健研究，63(2)，265-271.

服部洋子・原田正文　(1991)．乳幼児の心身発達と環境　名古屋大学出版会

岩田美佳　(2000)．現代社会の育児不安　家政教育社

加藤　厚　(1983)．大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究，31(4)，20-30.

川井　尚他　(1993)．育児不安に関する基礎的検討　日本総合愛育研究所紀要30集　27-39.

河村茂雄・武蔵由佳　(2001)．自我同一性地位を規定する要因の検討　カウンセリング研究，34，23-32.

経済企画庁国民生活局　(1987)．新しい女性の生き方を求めて

牧野カツコ　(1982)．乳幼児をもつ母親と〈育児不安〉　家庭研究所紀要，3, 35-56.

牧野カツコ　(1985)．乳幼児をもつ母親の育児不安　家庭研究所紀要，6, 11-24.

牧野カツコ　(1987)．乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安　家庭研究所紀要，9, 1-13.

宮本純子 (2007). 乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究 心理臨床学研究, 25(3), 346－355.
永久ひさ子 (1995). 専業主婦の生活と心理 現代のエスプリ331, 至分堂, 171-181.
名越清家・小高洋子 (1997). 乳幼児を持つ母親のライフコースと育児不安 福井大学教育学部紀要, 53, 52-72.
岡本祐子 (1995). 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について 広島大学教育学部紀要, 44, 145-154.
岡本祐子 (1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47(9), 849-860.
岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
岡本祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
岡本祐子 (2002). 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
大日向雅美 (2002). 育児不安 こころの科学103 日本評論社 9-15.
武田京子 (1998). わが子をいじめてしまう母親たち ミネルヴァ書房